

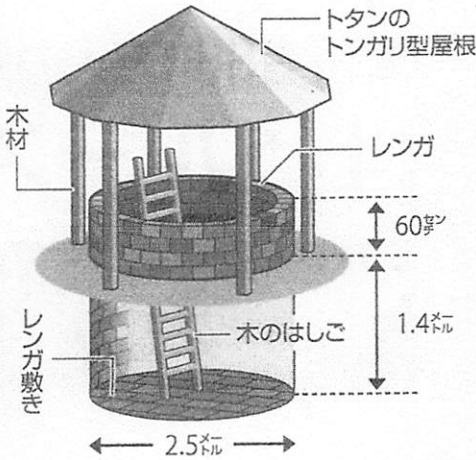
少年たちの前線 館山に

2015.6.24 読売4巻

民防空監視哨 経験者証言 手記に

先の大戦で、本土に襲撃する米機をいち早く見つける軍の監視哨の補助として「民防空監視哨」があった。機密扱いだったため、実態はよく分かっていないが、首都防衛の玄関口、館山市の「富崎民防空監視哨」の詳細が、動員体験のある豊崎栄吉さん(86)(館山市布良)の証言で明らかになった。親戚で元中学校教師、山口栄彦さん(84)(日本文芸家協会会員)が聞き取って手記にまとめている。(笹川実)

戦後70年



豊崎さんが再現した聴音壕のイラスト



移転後の富崎監視哨跡地で、固定式対空双眼鏡があった場所に立つ豊崎さん(右)と山口さん。今では周囲に民家が立っている。(6月15日、館山市布良で)

南房総の民防空監視哨は詳細記録が残っていない。館山市史によると、東部軍司令部・館山防空監視隊本部が北条警察署(現館山署)2階にあり、1941年(昭和16年)、下部組織が市内の富崎を始め、館山、洲崎(西岬)各地域など安房地方の十数か所に置かれた。

豊崎さんによると、富崎監視哨は当初、館山市布良と旧白浜町の境に設置された。開設数か月後には、軍の電波探知機陣地構築のため、旧富崎小の敷地内に移転した。豊崎さんは移転後の44年6月に入哨。富崎村青年学校2年生、16歳だった。

哨長と副哨長の4人は軍経験の大人。青年学校から動員された14〜18歳の18人が哨員となり、3班に分かれて1日交代で哨に入った。班内で2人ずつのペアを3組作り、立哨、連絡、炊事などを交代でこなした。通信連絡や炊事・待機用の30平方メートルほどの小屋1棟があり、太平洋が一望できる建物前に固定式の対空双眼鏡が2台。その脇に直径

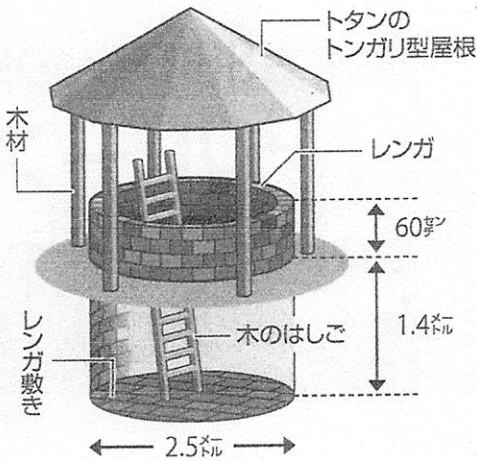
穴があった。これは雨や曇りの日に爆音で機種を識別するための「聴音壕」。豊崎さんは「飛行高度や機体の色、爆音で、機種を識別する訓練を徹底的に受けた。しかし、壕で識別できたことはなかった」と語る。青年学校は動労青少年の夜間学校だった。監視哨が非番の時は漁師などとして働き、夜に勉強した。44年秋、1万メートル上空を飛ぶ米機B29を哨員が発見、空襲警報につなげ表彰された。豊崎さんは、45年春の潜水艦攻撃船駆逐艦の惨劇が忘れられない。監視哨の前方で米機B24の攻撃を受けて撃沈。米機が去るまで住民らは助け船を出せず、大勢の兵士が死んだ。後日、平砂浦上空で米機P51が被弾し、墜落。操縦士がパラシュートで脱出、着水すると米軍の潜水艦が浮上し救助した。いずれも双眼鏡で目撃した。目の前の海は既に米軍が掌握していた。

豊崎さんに詳細証言を勧めた山口さんは、監視哨は少年たちの「前線」だったと考えている。「民間の青少年が動員され、資料がほとんどない監視哨の記録を残したい」と聞き取りを続けている。

少年たちの前線 館山に

戦後70年

豊崎さんが再現した聴音壕のイラスト



移転後の富崎監視哨跡地で、固定式対空双眼鏡があった場所に立つ豊崎さん(右)と山口さん。今では周囲に民家が立っている。(5月15日、館山市布良で)

民防空監視哨 経験者証言 手記に

先の大戦で、本土に米襲する米機をいち早く見つける軍の監視哨の補助として「民防空監視哨」があった。機密扱いだったため、実態はよく分かっていないが、首都防衛の玄関口、館山市の「富崎民防空監視哨」の詳細が、動員体験のある豊崎栄吉さん(86)(館山市布良)の証言で明らかになった。親戚で元中学校教師、山口栄彦さん(84)(日本文芸家協会会員)が聞き取って手記にまとめている。(笹川実)

南房総の民防空監視哨は

詳細記録が残っていない。

館山市史によると、東部軍司令部・館山防空監視隊本部が北条警察署(現館山署)

2階にあり、1941年(昭和16年)、下部組織が市内

の富崎を始め、館山、洲崎

(西岬)各地域など安房地

方の十数か所に置かれた。

豊崎さんによると、富崎

監視哨は当初、館山市布良

と旧白浜町の境に設置され

た。開設数か月後には、軍

の電波探知機陣地構築のため、旧富崎小の敷地内に移

転した。豊崎さんは移転後

の44年6月に入哨。富崎村

青年学校2年生、16歳だっ

た。

哨長と副哨長の4人は軍

経験の大人。青年学校から

動員された14〜18歳の18人

が哨員となり、3班に分か

れて1日交代で哨に入った。

班内で2人ずつのペア

を3組作り、立哨、連絡、炊

事などを交代でこなした。

通信連絡や炊事・待機用の

30平方メートルほどの小屋1棟

があり、太平洋が一望でき

る建物前に固定式の対空双

眼鏡が2台。その脇に直径

穴があった。これは雨や曇りの日に爆音で機種を識別するための「聴音壕」。

豊崎さんは「飛行高度や機体の色、爆音で、機種を識別する訓練を徹底的に受けた。しかし、壕で識別できたことはなかった」と語る。

青年学校は勤労青少年の夜間学校だった。監視哨が

非番の時は漁師などとして働き、夜に勉強した。44年

秋、1万メートル上空を飛ぶ米機

B29を哨員が発見、空襲警報につなげ表彰された。

豊崎さんは、45年春の潜水艦攻撃船「駆潜艇」の惨劇が忘れられない。監視哨の前方で米機B24の攻撃を受けて撃沈。米機が去るまで住民らは助け船を出せず、

大勢の兵士が死んだ。後日、平砂浦上空で米機P51が被弾し、墜落。操縦士がパラシュートで脱出、着水すると米軍の潜水艦が浮上し救助した。いずれも双眼鏡で目撃した。目の前の海は既に米軍が掌握していた。

豊崎さんに詳細証言を勧めた山口さんは、監視哨は少年たちの「前線」だったと考えている。「民間の青少年が動員され、資料がほとんどない監視哨の記録を残したい」と聞き取りを続けている。